

## 独日グリム兄弟シンポジウム

野原章雄

### **Bericht über das deutsch-japanische Brüder-Grimm-Symposion**

Akio Nohara

Das erste deutsch-japanische Brüder-Grimm-Symposion hat in der Heimatstadt der Brüder-Grimm, Steinau an der Straße, von 16. bis 19. September 1999 stattgefunden. Unter der Schirmherrschaft des hessischen Ministerpräsidenten hat die Brüder-Grimm-Gesellschaft mit der japanischen Gesellschaft ein großes deutsch-japanisches Brüder-Grimm-Symposion mit 34 Referenten aus fünf Ländern veranstaltet. Teilnehmende Länder waren außer Deutschland und Japan auch Island, Taiwan und Portugal. 10 Japaner haben teilgenommen. Die Referate, die von Japanern gehalten wurden, behandelten auffallend oft die Rezeption der Brüder Grimm in Japan, während deutsche Referenten z.B. von Grimmschen Wörterbuch, Jacob Grimm, vom Ursprung der Sprache und der Verwendung von Motiven der Grimm-Märchen in der Karikatur handelten. Daß Beziehungen zwischen Märchen und Psychotherapie geäußert wurden, spiegelt die sozialen Verhältnisse unserer Zeit wider. In Japan hat man bisher den jüngeren Bruder des berühmten Brüderpaars Jacob und Wilhelm, namentlich Ludwig Emil Grimm, der als Maler aktiv war, etwas vernachlässigt, über ihn wurde jedoch in Deutschland intensiv geforscht.

1.

第1回独日グリム兄弟シンポジウムが1999年9月16日—19日までヘッセン州のシュタイナウで開催されました。本稿はその時のまとめである。人口が12,000人たらずのこの小さな町がシンポジウムの会場となった理由は二つあるでしょう。ここは兄弟の父親の故郷であって兄のヤーコブは6才から11才まで弟のヴィルヘルムは5歳から10才までの5年間すごしたことと、同じヘッセン州の大都市のカッセルはグリム兄弟博物館がありよく知られていたがこのシュタイナウはあまり知られていなかった。しかしながらここにもグリム兄弟がかつて住んだ家が現存しておりその「グリム兄弟の家」は博物館となっていたが、カッセルのものほど知られていなかった。ここに研究者や観光客を迎えたいということもあったようだ。

プログラムの町長のハンス・ヨアヒム・クノーベロッフ氏の挨拶にこうある。「私たちのメルヘンの町、グリム兄弟の青春の楽園は様々の観点からいしえの時代のように見做されています。町の中心にはドイツの他の地域には殆んど今では見られないようなルネッサンス時代の統一のとれた建築の全体像がある。それでこの町は“童話のように美しい”町とすることができます。町の中心の最も美しいルネッサンスの建築物の一つはグリム家が1791年から1796年まで住んだかつての地方裁判所(Amtshaus)です。当時はこの建物は裁判所と官舎を兼ねていました。ここでヤーコブとヴィルヘルムは彼らの他の兄弟姉妹と子供時代をすごしました。」

現在「グリム兄弟のシュタイナウ」と呼ばれているこの建物は兄弟がかつてくらしした現存する唯一残されているものであった。町長はさらに言う。「グリム兄弟ハウス」には数多くの展示物、催し物でさらに多くのお客さんを世界中からシュタイナウにおさそいします。その理由はここ

ではグリム兄弟の特徴的な子供時代の思い出を他ではまねのできないような雰囲気の中で追体験できるからです。」

そして町長は「このシンポジウムがグリム兄弟の生涯での一つの停車駅として及び世界中のグリム研究の場としてシュタイナウを確かなものにしてほしい。」と結んだ。

## 2.

このシンポジウムの後援者のヘッセン州の首相ローラント・コッホ氏の挨拶を次に紹介してみよう。ヤーコブとヴィルヘルム・グリムはドイツ語とドイツ文化に全体として不可欠のものを後世に伝えてくれた人物です。兄のヤーコブは1854年の「ドイツ語辞典」の前書で次のように述べている。「言語は万人に知られているものであると同時に一つの神秘でもある。」

19世紀の同時代の人々や次に続く世代に言語の多くの神秘性を新たにかつ強力的に明確化したことはグリム兄弟の功績でした。それで言語はその魅力に関して何も失うことはなかった。言語の価値は反対にそれが明白になればなるほど話し手の意識の中に入ります。グリム兄弟は辞典と共にたどってきた目的を次のように説明している。

「言語の聖殿を建立して言語の全ての宝を保管して万人に聖殿への入口を公開する予定である。」彼らは辞典作りでこの願望をなしとげました。ヘッセン州の私たちはグリム兄弟が私たちの州と密接に結びついているということを誇りにしたいと思います。つまり彼らはヘッセンで生まれて彼らの大半の人生をヘッセンのハーナウ、シュタイナウ、マールブルクとカッセル市ですごしたからです。彼らはヘッセン州全体を代表しております。ベルリン時代においても故郷のヘッセンと心の結びつきを感

じていました。しかしながら二人は常に自分達の視線を他のドイツの諸州や諸州の統一に向けていました。言語学者としてであれ、メルヘンの発行者としてであれ彼らの仕事全体を通して19世紀のドイツ統合を本質的に促進したのです。それでヤーコプ・グリムが1848年にフランクフルトのパウル教会での第一回国民議会の議員に選ばれて参加し、政治にも影響を与えたことは偶然のことではありません。

ドイツ文化はグリム兄弟から多大の恩恵をうけています。ヘッセン州は彼らの業績を特別に称える格別の意義があります。それでグリム兄弟の業績と影響を記念に残すために国際的に知られた二つの博物館がカッセルとシュタイナウにあります。カッセル版の作品と手紙類でヘッセン州はグリム兄弟が今日なおくにもとにいる州として学問のためにも貢献しているのです。

### 3.

ドイツのグリム協会の会長のヴォルフガング・ヴィントフル氏の挨拶は具体的かつ実際的内容に富むものである。氏はかつて州議会の議員をやっていたという。グリム協会はヤーコプとヴィルヘルムと二人の弟で画家になったルートヴィヒ・エミール・グリムの個人的学問的な遺産の保存、収集と記録する使命があり、それらの資料の学術的研究と整理を協会は批判的に議論して業績や世界的な作品の受容史と結びつけようと努力しています。

戦争で中断されたことがあったが1897年から存在する協会は1959年からカッセル市と共にグリム兄弟博物館を維持して1998年からはシュタイナウ市と一緒に「グリム兄弟の家」を運営している。今日協会はカッセルの博物館に依拠して重要な国際的な様々な要求を満たすために研究場所を設立しようとしています。グリム兄弟の作品はまず初めにその土

地の伝統の中に根を張っています。

しかしながら次にヨーロッパ全体の言語地方と文学的な伝統を開拓している。グリムの作品はそれでヨーロッパの文化史の百科辞典のようにも読まれているのである。その中で殆んどヨーロッパのどの民族も言語や文学、歴史と文化に関して言及されているのであった。グリム協会の会員とその多数の国際的な企画に携わった国は30ヶ国に及びます。

日本ではメルヘンが抜きん出て大事にされているばかりではなくてグリム兄弟のゲルマン語や法律に精通している研究者もおり、兄弟の歴史上の仕事も大事に見られているのです。

第一回のドイツと日本のグリム兄弟シンポジウムはこれから始まります。遠く離れた国の親交のある学者達との対話を通じて研究成果をお互いに開示しあってもっと大きな国際関係の中で両国の学問と文化の伝統を討論することに努めることを望みます。

#### 4.

カッセルのグリム協会の事務局長兼博物館館長のDr.バルンハルト・ラウアー氏がこのシンポジウムの概説をした。文学上の民俗学とゲルマン語の文献学の創始者としてヤーコプとヴィルヘルムの兄弟はドイツからはるか遠くにまで知られるようになりました。そして他の多くの国々で歴史学及び文献学の領域で影響を与えたのである。彼らは類まれな仲のよい兄弟であって共同生活と仕事を通じて、彼らの人生と共にドイツ人の伝統と考え方で非常に独特の人間像を代表するものであった。そのために特に世界中に知られ100万部以上も「子供と家庭のメルヘン」は発売されるのに貢献したのである。

日本へもグリム兄弟は大きな影響を及ぼしました。1862年（文久2年）にドイツを訪れた初めての日本の通商代表団はベルリンで80才近くの

ヤーコプ・グリムとすでに会見している。1887年（明治20年）にグリムのメルヘンが初めて日本語に翻訳されて以来、日本人に大きな共感を得ました。日本でのグリムの受容は現在いくつかの分野に見られます。学問とマスコミ、教育と授業の領域であったが宣伝あるいは観光の方面でもうかがえた。こうしてグリム兄弟の足跡をもとめてドイツを旅する日本人の観光客の数は毎年増加の傾向にありました。1984年以来北海道に全「グリム兄弟幸福王国」があります。その中には数1000㎡にわたる数多くのグリム兄弟と彼らのメルヘンと結びついた建物が模造され体験公園もつくられている。

またヘッセン州のディーツヘルツタール町と栃木県の石橋町の間の独日の協力でグリム兄弟の名前をその標語にして1996年に日本グリムハウスが開設されました。独日のシンポジウムの目的はより広汎なヨーロッパや東アジアの発展を踏まえて学術的で国を越えて広がる研究とドイツと日本のメルヘンと伝統的な伝説の比較をして欲しいことです。さらにグリム兄弟と彼らの作品の利用と異化効果を考慮して現代の大衆メディア文化の民俗学的な討論も期待したい。同時にグリムの文献学や全世界に及ぶグリム受容の普遍的な問題も取上げて欲しいとラウアー氏は提起したのである。

## 5.

9月17日（金）にカタリーネ教会で全体の集会が行われた。この古めかしい質素な教会はグリム兄弟の祖父が牧師を勤めた所であった。エアランゲン大学のDr.ハルトムート・ケーグラ教授のシンポジウム開会講演の概要をまとめてみる。演題は「メルヘンの向こう側のグリム兄弟」であった。グリム兄弟の生涯にわたる労作「子供と家庭のメルヘン」から世界中に及ぶ名声が発散して行ったとまず切り出す。ドイツ文学語学

研究者にとってはしかしながら独特の普仏戦争直後の泡沫会社乱立時代(1871~73)への回想物は興味があるでしょうと言う。クーグラー氏はカッセルのグリム協会の手で発刊されたヘルマン・グリム(Herman Grimm, 1828-1901, ヴィルヘルム・グリムの長男、文学史家・美術史家でベルリン大学教授として名高い。)と家族との手紙の交換—文通に主として光を当てていた。この書簡集に収められていた400通の手紙は1828年に生まれたヘルマンと母のドロテア(Dorothea)、父ヴィルヘルム及び伯父のヤーコプとの文通を内容としている。

「家庭内部の仕事場の報告」はしかしながら期待はずれでしょう。「家族の報告以上のものは何もないでしょう。」とクーグラー氏は言う。それは母と息子の手紙が中心であり母が手紙の口調まで決めているのであった。ヘルマンの手紙で最も内容のあるものは伯父のヤーコプ宛のものであろう。“Who is who?”のような日常の話が緊密に絡みあったものが印象的である。息子の将来の展望が学問の研究であると打ち明けられてもそれはまるで素人の考えにすぎないでしょう。3章からなる手紙は1838年に“PapaとA-Papa”題のついたもので始まっていた。A-Papaは伯父をさしているであろう。クーグラー氏はまず第一にギリシア語に由来すると思える言葉を単にヘッセンの方言から導き出しているようだ。つまり長く引きのばされたaはauchを意味して、A-PapaはAuch-Papa以上の何物でもない。若いヘルマンは自分の父と伯父を内輪の中に常に並存していると思っていた。

10年間の文通はラテン語で始まっている。1837年ゲッチンゲン大学の学生から人望を集めていた7人の教授が追放される事件が起きた。伯父はその一人であった。驚愕のあまり伯父はカッセルからヘルマンに手紙を書くことで心を落ち着けた。大学を追放された後に、最も重要と言える作品が生まれた。大学からではなくて家から生まれたのである。“ド

イツ文法”は「ヤーコブ・グリムをヨーロッパの権威にしたのである。」とクーグラール氏は言う。

第2章は、1848年頃の手紙を収めている。「学問と政治」という題がつけられていた。ヘルマンはボン大学では集中して勉強をしていないようであった。しかし彼はすぐれた子で自制心が強かった。「人々は自由の中にどっぷり漬かっているようにしている。」とごさかしげな発言もしている。手紙の第3章はおそらく1858年あたりから書かれたものでドロテア・グリムの新語の創造のあとで「辞書化すること」(Das Verwörterbuchen)という題がつけられている。ここでヘルマンは学問について引き入れられました。辞書の計画は言語が国民の進化史の生きた証明であるという観点のもとで「個々の単語の発生史」でもあった。フランクフルトのパウル教会での演説の中でヤーコブ・グリムは国民議会を「辞書での協力者スタッフ」と見なしているのである。最後にクーグラール氏は首尾一貫してつらぬかれているグリムの辞書の小文字書きについて強調していた。ヘルマンは1848年からそれをやってきたものだと。今日の正書法がグリム兄弟の目には恐らく改革とは見なされなかったであろうということをクーグラール氏は示唆して討論のきっかけになるものを残して締括った。

## 6.

最後にさらに2名の発表をまとめてみる。

カトリン・マティアスドーティア (アイスランド、Katrin Mathiasdóttir) 氏はアイスランドのコンラート・マウラーが収集した民族伝説とドイツの伝説の間の類似性を指摘していた。これらの民間伝説がビュルガー(Gottfrid August Bürger 1747-94)のよく知られたバラード“レオノーレ”(Leonore)の基礎になっていると言うのであ



た。彼女が挙げたマウラーの民間伝説の筋は次のようである。

一人の若者が恋人にクリスマスイブと一緒に教会の深夜の礼拝に行くことを約束した。彼は馬で彼女を迎えに出たが途中で激しく水かさが増した小川を渡ろうとした時に、馬がこちらに押し流されてきた流水に脅えて後ずさりした。彼はまずい手綱さばきで馬を水に沈めてしまいました。そこで馬を助けようと苦闘のあまりその騎士は鋭くとがった氷の塊で後頭部に負傷して死んでしまいました。

恋人は何も知らずに騎士を長いこと待っていました。夜遅くになってようやくその騎士が馬で現れて彼女を黙って自分の後に乗せました。そして一緒に教会に向かいました。途中で彼は一度彼女の方を振り向いて話した。月は空をすべるように動いてゆき、死は馬に乗ってゆく。ガルーン、ガルーンさん、君は僕の首筋の白い斑点が見えないですか。その女の子はグールドーンという名前でしたがグッド、ゴット（神）としかその幽霊は発音できないので、それで名前が変わってしまいました。

女の子は心配になりましたが二人は教会に着くまで馬を走らせた。ちょうど墓の前で騎士は止まって話す。ガルーン、ガルーンさん、私が馬を東の方の垣根の向こうにつれて行くまでここで待っていてください。グールドーンはこの言葉を聞くと気を失うが幸いなことに、彼女がおろされたそばに墓があった。よく鐘が吊るされている教会の墓地の入口のすぐ近くでした。倒れながら彼女はまだ鐘を鳴らす手綱をつかんでいて、これを見ていました。幽霊たちは鐘の音で消えてしまっただけで彼女は助かったということです。

マスティアスドーティアさんは、マウラーの収集した伝説が持つ明確なアイスランドの特徴を次のように指摘している。個々の点ではとても自由であるが全体的には非常に限定された統一的なものである。統一的

な種族における民間伝説の発展にはだから非常に良い例証となっていると分析する。

## 7.

日本グリム協会会長の橋本孝教授（宇都宮大）は「日本におけるグリム兄弟研究」を発表する。

第二次大戦後の研究について氏は言及したものだ。故田中梅吉さんは著書「グリム研究」の中でドイツ語辞典について詳細に紹介していた。

1947年にアメリカから教育視察団が来日して日本語をローマ字化しようと構想しました。そのときに田中さんはドイツでは自国の言葉を大切にしていることを主張したのであったが、これは残念なことであったがドイツ文学語学者の間でしか知られなかったのである。

一方グリム等のドイツ民俗学から影響を受けていた柳田国男（1875-1962）は日本人のIdentitätを求めるように日本の民族伝承、民話、民謡等の大切さを説くのであった。しかしながらちょうどその折に日本経済が上昇しはじめたことによって、これらの民俗学が無視され始めたのである。この間のいきさつについて橋本教授は自動車産業を例にあげて三項目に集約している。

1. 自動車の価格を安くする。2. 車体を軽量化する。3. 燃費をよくする。以上の三点で日本車は飛躍的に国内はもとより海外で売れ出したのである。軽量化するということはコンピューター、ウォークマン、カメラにもこの原則が通用して日本商品が世界の市場に出まわったのである。つまりこれは日本文化の輸出であった。そのために日本人は自分のルーツをもとめたり、Identitätを求めることを疎にした。経済は上昇の一途をたどりついに60年代からのバブル経済時代につながりつた。バブル経済のために日本人は慌てふためいたのである。作家の有吉佐和

子さんが「複合汚染」の中で指摘していたように公害問題が各地で出てきた。しかしそれ以前から公害問題は出ていたものだ。バブル経済後の日本の経済は公害への取り組みを始め環境保護に少しずつ目を向けるようになる。クルマの安全性、人命の尊重がようやく人々の間に理解されるように行った。グリム兄弟が清貧の生活の中からすぐれた研究を世に出したことが改めてわかった次第である。

日本人はそれで清貧の思想から Identität を求める如く、農山村の棚田の存在を見直し始めました。棚田の効果を人々は知りました。水害や灌漑の問題にとどまらずに棚田は日本の民俗学の原風景を現出していることに多くの人が気づいたのです。そういう所から日本人の原点を求めるために童話に人々は心を向けるようになり Identität をもとめたとと言えるのではないのでしょうか？ その端緒として「ソフィーの世界」が出るとベストセラーになったのはそのルーツをもとめようとしたためでしょう。こういう中でグリム童話をパロディー化したものが生まれた。その結果が「本当は恐ろしいグリム童話」で頂点に達したと言えよう。しかし日本人が意識的あるいは無意識的であるにせよ、Identität を模索し始めたことは事実である。人々は心のいやしをグリムに求めた。それで昨今のグリムブームが起きたのでしょう。さらに政府の地方分権化への政策が後押しをして国内の各地にグリム兄弟あるいは童話に関する博物館が建設されました。その好例として栃木県石橋町のグリムの館、黒姫童話館、軽井沢絵本の森美術館、北海道帯広のグリム兄弟グリック王国などがあげられます。以上が橋本教授の発表の概要である。

その他の日本からのレポーターの印象に残った発表を列記してみる。グリム兄弟受容史に関するものだ。野口芳子教授（武庫川女子大）「明治時代における日本のグリム兄弟」、中山淳子教授（竜谷大）は明治と大正時代の「グリム童話の評価」、奈倉洋子教授（京都教育大）は「大正

時代におけるグリムのメルヘン」とを述べられた。明治20年に出たグリム童話の最初の邦訳『西洋故事神仙叢話』が英語からの重訳であったことは知られているがその題名からグリム童話であるとは想像できないようだ。岩井方男教授（早稲田大）は「グリムの作品の我々の新しい翻訳計画—メルヘンを除く童話的なもの」と題して翻訳上の苦勞を話された。しばしば出席者の笑いをさそう。

天沼春樹講師（中央大）の「日本の宣伝広告とマスメディアにおけるグリムのメルヘン」は我々の身近で意外なところにグリムのメルヘンからの名前がつけられていることに驚かされる。薬の宣伝にシンデレラ派、グリム動物病院、洋菓子の店赤ずきん、コーヒーショップのグリム館、喫茶ぐりむとある。以上のことから日本ではその人口からしてもドイツよりもグリム童話の読者は多いであろう。

今回のシンポジウムは2年後に日本で開催されることになっているが、ドイツからはたして何人ぐらいの参加者があるであろうか。